

タイトル	『G20サミットから見える世界経済』によせて
著者	平野，研；HIRANO, Ken
引用	季刊北海学園大学経済論集，67(3)：1-1
発行日	2019-12-30

《市民公開講座》

市民公開講座 『G20 サミットから見える世界経済』によせて

平 野 研

2019年7月20日に開催された北海学園大学市民公開講座『G20 サミットから見える世界経済～G8<G20～』では、本学経済学部所属の世界経済に関わる3人の研究者が登壇した。同年6月28・29日大阪にて開催されたG20サミット（金融・世界経済に関する首脳会合）を受けて企画された本市民公開講座は、多くの市民の関心を引き寄せ、盛会であった。

特に、G20サミットに対して異なる視点から分析がなされ、歴史的な経緯、今後の可能性、そして課題について多岐に渡って提示されたことは、掘り下げられた議論を参加者に提示することができた。まず越後修教授は、国際貿易秩序という側面から国際会議の役割を歴史的、理論的に整理し、議論の土台を提示すると同時に、現在の国際会議の課題やその中でのG20サミットの役割や問題点を明示した。それを受けて第二報告で宮島良明教授は、アジア新興諸国の高い経済パフォーマンスが世界経済の在り方そのものを構造転換し、G20サミットという国際会議の新たな役割を示した上で、同年10月開催の観光大臣会合も見据えて、アジアからのインバウンド効果など幅広い報告がなされた。さらに大屋定晴教授の第三報告では、世界経済の潮流の変化を、新自由主義ベースのグローバル資本主義の転換期とも捉え、国際会議の場でNGO/NPOなどを含む市民運動が行う政策提言的、あるいは対抗的な「声」について紹介され、G20サミットでの国内外での状況について報告された。

このような多角的な議論は、パネルディスカッションでさらに深まっていった。日本でのG20サミットでの目立った成果がなかったという評価に対して、G20サミット自体が世界経済の危機的状況においてこそ最大のパフォーマンスを示すので、この時点での成果は期待できない、という共通の見方が示された。一方で、世界経済の捉え方において様々な意見が展開され、立場の違いが明示され、論点が整理されるという場面もあり、活発な議論が行われた。しかし、各報告、パネルディスカッションは50分程度であり、更なる議論展開の可能性を感じさせながらも、残念ながら閉会となった。

その後10月25・26日に開催された、G20観光大臣会合（倶知安町）も無事終了し、本公開講座で登壇した論者の中で改めて、国際会議G20サミットを通じて変化する世界経済について議論する論文企画をしてはどうだろうか、という話が持ち上がった。講演だけでなく執筆の労を取っていただいた3人に感謝するとともに、実り多かった市民公開講座の内容をこのような形で現すことができることはうれしい限りである。また本市民公開講座は、本学開発研究所の紹介により、G20観光大臣会合実行委員会および北海道庁の後援を受け、地域社会との新たなつながりの可能性を示すものであったという意味でも有意義であったといえる。